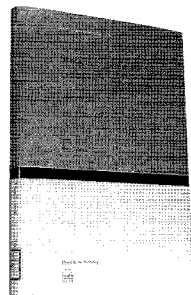


■ 自 著 紹 介 ■

Syntactic Structure and Silence: A Minimalist Theory of Syntax-Phonology Interface [Hituzi linguistics in English:No.9]



by Hisao Tokizaki

Hituzi Syobo
2008.2

大学院生の夏。喫茶店で本を読んでいて、ふとある考えが浮かびました。これで言語をうまく説明できるかもしれない、そう思って続けてきた研究をまとめたのがこの本です。

言語には、語や句のまとまりがあります。日本語の読点も、英語のポーズも、まとまりを区切って示しています。「すもももももものうち」はわかりづらくても、「すももも、ももも、もものうち」なら大丈夫。英語も“The girl I met at the party # was very nice.”のように、長い主語の後ではポーズを置くことがあります。こうして、書く人・話す人は語や句のまとまりを読点やポーズで示し、それを手がかりに読む人・聞く人は、語や句をまとめて立体構造を作

り、意味を理解すると考えられます。そして句点(。)や長いポーズは、文という、より大きなまとまりを示し、さらに改行と字下げや、より長い間(ま)は、段落を示します。本の章ごとに改ページがなされているのは、さらに大きな隙間を示すため。交響曲やテニスの試合だって、楽章やセットの合間に休憩時間があってまとまりを示しています。

すきまの長さが構造を示す。このことがいろいろな言語の音や文法や意味に影響していることを考えてきた、僕の二十数年が詰まった本。図書館で手に取っていただけたら幸いです。[801.5 || To33]

(外国語学部教授 時崎久夫)